

# レッコ・アンカー

## 第一章 <sup>まかない</sup> 賄 編 (1) 新造船 大和丸

我が家では俺のことを一家の恥晒<sup>はじさら</sup>しだと言っている。スポーツは万能だが、大学受験の勉強などは何時もそっち除けだった。そして案の定、失敗した。それも二回も。一浪もしてだ。もちろん超一流大学の難関学部である。破天荒<sup>はてんこう</sup>の俺は夢だけは人一倍大きい。海外へ行って事業をしよう、俺の住みかは世界だ、やらなければ何も解からない。何も行動せずに批判する奴を俺は軽蔑する。何も行動しないより、行動して失敗する方が、どれほど価値があるかを俺は知っている。俺のことを笑う奴は笑えばよい、俺の命は俺のものだ、人と同じ人生なんかクソ喰<sup>く</sup>らえだ。

水泳、長距離走、マラソン、ラグビー。そのどれを取っても、都市対抗クラス、高校ではヒーローだった。しかし大学入試に失敗し、貧乏一家に育った俺には働く事しかなかった。だけど俺がめげなかったのは、高校時代に勉強をしなかったからだ。やれば出来る、やらなかったから失敗した。と言うのは、実際勉強しなくとも実力テストではいつも上位だったからだ。絶対、人と同じ生き方はしない。俺は俺の人生を生きる。さー頑張るぞ！

昭和42年(1967年)3月

「おじさん、俺、海外で商売したいねん。おじさんの会社の船でシンガポールまで乗ってくれへんか？もちろん俺、金持ってへんから。」「お前アホちゃうか！お前、海外の事なんかちっとも解かれへんのに！俺の会社で新造船が出来てくるから1年だけ乗ってみろよ。今サロンがないからサロンでよければ乗つけてやるよ。お前、パスポートも無いくせに海外で商売する？よう言うわ。パスポート取るんやったら多分貯金通帳に20万円以上の残高があるし、金が無かったら取られへんぞ。それから海外への金の持ち出しは500ドル迄やし。先ず、海外を知って、金を貯めて、それからや。」

昭和42年(1967年)4月

広島宇品ドック

朝から叔父が専務をしている徳山海運のパーサーが、広島海運局まで俺を連れて行ってくれた。前もって取っておいた戸籍謄本<sup>こせきとうほん</sup>と住民票の転出届を手渡し、船員手帳を発行してもらった。その足でクリニックへ行き、予防接種を打ち、ドックに隣接する寮へ直

行した。そこで食事をとって間もなく、「さあ、お前は今からサロンボーイや。主調事しゅちようじとオヤジの言う通りにしろ。」 叔父はさらりと言って長崎の本社へ帰って行った。主調事しゅちようじとは司厨長しちゆうちよう、オヤジとはコックの事である。ここで驚いたことにオヤジは俺より年下である。

「おい、サロン、これを洗い終わったら、ここにある荷物を全部本船へ持って行け。」

オヤジがこの年上の俺に食器類、厨房用品、消耗品等、半端じゃない量の物を寮から本船に持って行けと言うのだ。それも一人で！ それが終わったのは夜の1時だ。

翌朝5時半にオヤジが俺を起こしに来た。「お前、何時まで寝てるんや！米は洗ったんか？」「はい。」俺は眠い目を擦りながら洗面所で顔を洗って、用意しておいたサロンの仕事着である白いワイシャツに蝶ネクタイと言う出で立ちで寮の厨房ちゆうぼうに向かった。処女航海の時はドックでの賄まかないは大変である。外航船の船員は一旦船に乗れば殆ど10か月から1年間は家族と会えないのである。その為船員の家族がこの時とばかりに大挙して押し寄せるので、その人数を合わせると賄まかないの作る量は航海中の約3倍にもなる。本船『大和丸』は純トン数1990トン、総トン数2990トン。この時代でいえばごく普通の船である。乗組員は23名。

この日も飯炊きしゅちようじ、主調事、オヤジが作った料理の盛り付け、食後の皿洗い、仕込みの手伝い、その後、本船に持ち込んだ食器類の開封、皿洗い、収納、とんでもない量の仕事だ。仕込みとは料理の下準備の事である。叔父は俺がスポーツマンと言うことで雇ったんじゃないかと勘繰るほどだ。この日も深夜の1時を回っていた。

次の日は本船の試運転だ。試運転には女性は乗せない。それは船が女性名詞であり、女性を乗せると船のほうか、焼き餅を焼いて事故を起こさせるという言い伝えからだ。

我々船員が本船に乗船したのは午後の1時過ぎだった。もうタグボート2隻がスタンバイしている。

本船とは外航船を指し、船首は表おもて、船尾は艫ともと呼ぶ。

賄まかないの炊事場はギャレーと呼ばれ本船の艫ともにある。ここで料理が作られる。

そのの什器じゅうきとしては、鑄物製の蒸気いものせいでご飯が炊きあがるライス・ボイラー、そしてプロパンガスのデカイオーブ

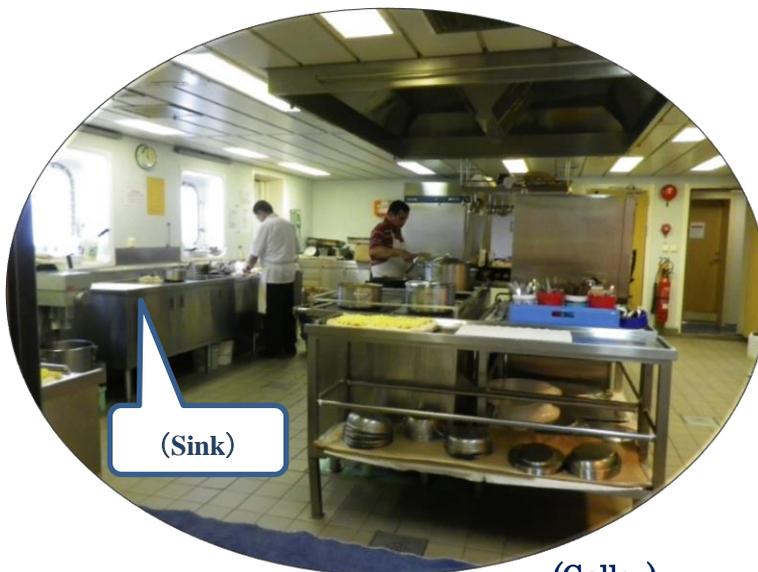


(Tugboat=タグボート)

ンとガスコンロが設置されている。

あとはステンレス製の調理台にシンク (Sink=流し台)と言ったものだ。また地下一階にはチャンバー (Refrigerating Chamber) と呼ばれる、人が余裕で入れる冷凍庫と、野菜室がある。

我々 まかないれんちゅう 賄連中は一通り片づけを済ませればあまり仕事がないので、ただ試運転を見守るしかない。



(Galley)



(接岸中のばら積船)

『ウィーンー。』ギャレーの外にあるキャプスタン(Capstan)の始動音が鳴り始めるとセコンドッサーが「ホーサーを下ろせ。」と叫んでいる。キャプスタンとはホーサーを巻き取ったり、巻き戻したりする機械の事を言う。ホーサーとは大索だいさくすなわち本船とビットを繋ぐつな太いロープの事である。コーター・マスター、セーラーはフェアリーダーからタグボートにホーサーを手繰りたぐ下ろすと、タグボートの乗組員はそれをタグボートのビットにまきつけて、ゆっくり沖の方に引っ張り出した。

また一方では、岸壁側のヘッドラインと、スプリングラインがムアラーによって外さ

れ、<sup>とも</sup>艦の方から岸壁を離れていく。

ヘッドラインとは本船から離れたビットに掛けるホーサーの事で、スプリングラインとは、本船の内側の、ビットに掛ける、ホーサーの事である。ムアラーとは、<sup>もや</sup>舳りを掛けたり外したりする人工<sup>にんく</sup>の事を言う。

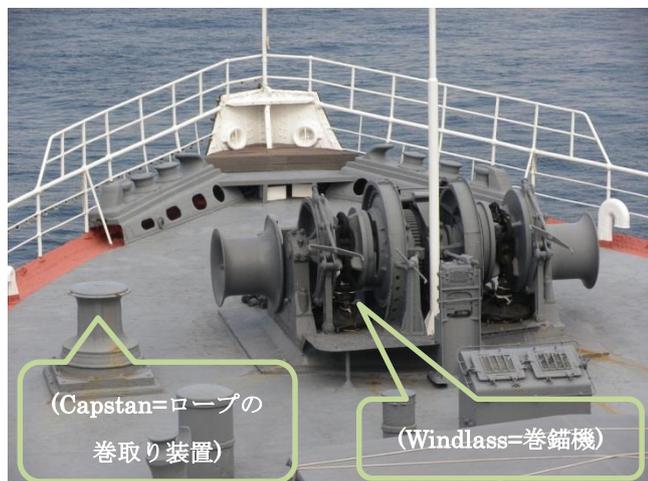
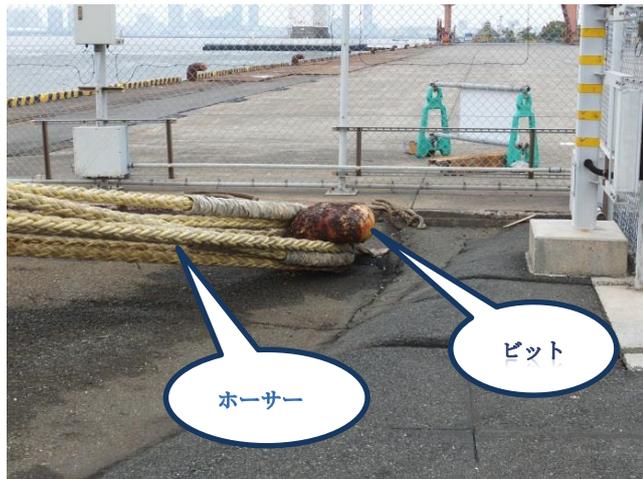
一方<sup>おもて</sup>表ではスプリングラインとヘッドラインを巻き締めている。こうすることによって本船の<sup>とも</sup>艦が沖の方を向いていく。

セコンドッサーは<sup>とも</sup>艦のマイクから表<sup>おもて</sup>のチョッサーに「<sup>とも</sup>艦、タグのライン、放します。」「表<sup>おもて</sup>、了解。ブリッジどうぞ。」どの様な会話なのかも解らないまま、見守っているだけなのである。

すると本船がバックし始めた。どんどん沖の方に向かっていく。<sup>しばら</sup>暫くして急に<sup>とも</sup>艦の下から泡が出始めスクリュウが反転し、本船が前進し始めた。

スクリュウから巻き上がる航跡がアーチ状に時計回りにくっきり出はじめた。初めて船に乗った俺は感激で血の湧き立つような興奮が止まらない。周りの景色がどんどん変わっていく。

今までドックに繫<sup>つな</sup>がれたままの船が動き出したのだ。今日から俺の人生が展開し始める。



(Windlass=ウインドラス)



さあ、明後日からは本当の船乗りになる。涙がにじんできた。



本船は広島近くの2～3時間回ってドックに戻ってきた。船に乗ったことのない俺には何処を走っているか等、全くわからない。

今日もこの後またすぐに夕食の準備だ。ああ疲れる。もう限界！ 限界！明日は明後日<sup>あさって</sup>の処女航海に向けて食料品の積み込みだ。

処女航海前日。

もう俺の体力は限界に達している。

起床は5時。船員とその船員の家族の食事が終わって皿洗いが終わったのが9時を回っていた。立ち仕事に慣れない俺はこれ程長い間立ったまま仕事をした事がなかったので足腰が棒みたいになり、動くのも辛い程である。だけど俺はスポーツマンである。絶対弱音は吐けない。

10時には船食(免税の食品や、雑貨を扱う業者)や船具屋らが本船にすでに来ていた。

デッキ(甲板部)の連中はいろんな工具やワイヤー、ホーサーやロープをそれぞれの場所に仕舞い始めている。水屋(水道局)も陸上から消防士が使うようなホースで清水<sup>せいすい</sup>タンクに水を送り始めた。



エンジン（機関部）にはタンカーが本船にアロングサイド（横付け）して重油や軽油をパイプを通して積んでいる。エンジン部員らも油だらけになって膨大な量の消耗部品や工具を点検しながら受け取っていた。

司厨部では当初、船食に食料を入れる場所を指示したり、それを手伝う位で大した仕事は無かったのだが、船食が帰った後、食料が簡単に取りやすくする為の入れ替え作業が殊のほか多くてさすがの俺も余力が無い程になっていた。

昨日から冷やしておいたチャンバーの冷凍室はもう完全に冷え切っている。そこに冷凍の牛肉、豚肉、鶏肉、魚類、貝類などびっしり詰め込み直すのだ。その量や大きさは、今まで一度も見たことが無い程デカイ。ビーフ（牛肉）もポーク（豚肉）も肉屋さんでうすく切った物やカレー肉のように細かく切った物しか見ていなかったのも、なお更である。冷蔵室もまた半端じゃない量のポテト（馬鈴薯）、オニオン（玉葱）、キャロット（人参）、エッグプラント（茄子）、スピナッチ（ほうれん草）なども同じように詰め込み、またストアー（Store=倉庫）には乾物や缶詰、賄の消耗品等を多岐にわたって収納した。

ギャレー（<sup>しちゅうぶ</sup>司厨部）では<sup>ほどん</sup>殆ど英語が出来ない連中が、食材名を言う時だけ英語で言うことが多いので非常に面食らうのである。

今日は<sup>まかない</sup>賄の仕事が多くて昼食を作る時間がなく、船食に船員と家族の分として弁当を持って来るように注文しておいたので、仕込みや皿洗いは無いのだが食材はどれも重く、ますます俺の体力を奪っていった。

今迄いろんな事を書いたが、勿論、俺が最初からいろんな事を知っている訳ではなかった。乗船後次第に覚えて行くのであるが、各状況を説明するために<sup>べんぎじょう</sup>便宜上書いたのである。

この忙しさも夕食と明日の朝食までだ。夕食の後片付けが終わり、今日は寮でゆっくり休めそうだ。

次の朝、夜明けの薄明かりがさし始める頃、目覚まし時計の大きな音で目が覚めた。寮で最後の朝食の用意をしている間も、俺の頭は早、夢の外国に飛んでいる。本船は何処へ行くのだろうか。どんな世界だろうか。

寮での最後の朝食が終わった後、船員達のここで帰っていく家族、神戸港で下船する家族、日本での最終港で下船する家族などさまざまだ。

帰って行く家族の中には涙を浮かべている人があれば、寮で「またな。」で済ませる

人もいる。俺たちは悲喜こもごもの人生模様を横目に世話になった寮の人々に挨拶を終え、全員本船に引っ越した。

さあ、俺の人生と本船大和丸のスタートだ！